

「Jスタイルズ」平渡淳一社長 48歳

1年の予定だったカナダ留学を、金がなくなり8カ月でやめて帰国した直後、平渡淳一は将来について決断する。22歳の時だった。

「まず30歳で起業する。やはり自分で稼げなきゃ、意味はないから。やるのは世界を相手にする事業。起業と海外がこれからの僕のテーマだ」

短縮を余儀なくされたものの、留学は彼の人生を方向づけた。一方、明治大の学生生活では女子大との合コンに明け暮れる。その回数は100回を超えたが、常に幹事を務めたため、会費は一度も払わなかった。

「例えば『今日の相手は外から友達を紹介してもらった』としても、相手の誰かから友達を紹介してもらったんです。単発ではなく連続性を心がけた。また、盛り上げ役などメンバーには役割を与えた。営業や経営の基礎を僕は合コンから得ました」

夫人になる亜希子とも合コンで知り合う。1994年、4年生になるが就職戦線は氷河期に突入していた。団塊ジュニア世代である平渡らは、受験競争も激しかったが、就活はさらに厳しかった。それでも、旧三菱銀行から内定を受ける。明大から当時の都銀トップ行に就職できたのは、ほんの一握りだった。なのに、内定を蹴ってしまった。

明大時代は合コン三昧

経済ジャーナリスト 永井隆

語り部の経営者たち

22歳の時「30歳で起業する」と決める



就職先と決めたのは、無名で未上場の血液検査メーカー。独自に調べたところ、世界シェアは高く、海外支店も多かったのだ。「この会社は必ず伸びる」と見立てた通り、やがて上場し、優良企業に成長していった。

「でも、僕の本当の狙いは海外赴任し、起業のための力をつけることでした。会社を利用しなかった」

「海外事業部で働いても、すぐには海外赴任ができません。いと分かったからでした。30歳に間に合わない」

仕方なく、テーマの一つ「海外」を一時的に封印。97年1月、平渡はベンチャー・リンクに入社する。同社は中小企業の経営支援、とりわけ90年代後半からF C(フランチャイズ)支援を展開していた。平渡は新規事業部門に配属された。

「いまも第一線の経営者として活躍している。Bは多い。高いノルマが設定され、長時間労働は当たり前のブラック企業でしたが、みんな鍛えられたからでしょう」。

翌95年4月に入社。横浜支店に配属される。合コンで鍛えた営業力に加え、ライバルが訪れない個人医院や区役所、水族館、さらに動物病院などを回る作戦が奏功。営業成果を上げ、希望の海外事業部への異動が決まる。しかし、直後の95年末に退職してしまう。

「転職はやめて、落ち着いて欲しい。お父さんが結婚に反対している」

「転職はやめて、落ち着いて欲しい。お父さんが結婚に反対している」

「転職はやめて、落ち着いて欲しい。お父さんが結婚に反対している」

トランプに握られた日本人の胃袋

米国でも急増中



▽おくの、年、「ナンシ」フィクション、力的に取材、なアメリカカ

クオカード 1万円

懸賞クイ

お楽しみ

出題・准

第2149回

1...若手女優との不倫と別居状態が報...
俳優...一昌大
4...日曜夜の人気ア...
6...何時か知りたいと